



フランクリン自伝

フランクリン著 渡邊利雄訳

中央公論新社 2004 (中公クラシックス)

商学部教授 奥瀬 喜之

本学に来て10年以上が経つが、キャンパスで澁漣とした学生の姿を見てうらやましいと思うことは少ない。不惑を過ぎ、些細なことで身体のあちこちが悲鳴を上げるようになった今、「私も20年前はもっと気力も体力もあったのに…」と思うことも少なくない。小稿を目にしている学生諸君は、学生の特権ともいえる気力、体力、そして時間の価値に気がついているだろうか。そしてそれらを持って余していないだろうか。

『フランクリン自伝』はベンジャミン・フランクリンの生涯を描いた読み物として読むこともできるが、学生生活を無為に過ごさないための自己啓発書として読むこともできるだろう。実際、本書はその類書としてしばしば取り上げられる。

本書の中でフランクリンが示した「13の徳目」は今でも十分に通用する。むしろ今だからこそ見直すべき徳目も

ある。例えば、「沈黙」という徳目では「他人または自身自身の利益にならないことはしゃべらないこと。つまらぬ話は避けること。」と述べている。TwitterやLINEで益無い話に時間を費やしていないだろうか。「勤勉」という徳目には「時間を無駄にしないこと。有益な仕事につねに従事すること。必要のない行為はすべて切り捨てること」とある。学生である期間、そして人生は短く、無駄なことに割く時間などないのだ。

もっとも、フランクリン自身もこのような徳目を設けたものの、必ずしも全て遵守できた訳ではないようだ。遵守することよりも自己修養に「努める」ことに意味があると考えられるべきなのだろう。自堕落な生活を送らないための日々の心がけ、自分を律するためのチェックリストとして、これらの徳目に目を通す習慣をもっとよいのではないだろうか。